

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎 の米国体験（1867年6月～1868年10月）

— サンフランシスコ長期滞在日本人に関する
日米史料の照合から見えてきたもの

塩 崎 智

Experiences of Gonroku (Choujun) Sasaki,
a samurai of the Fukui domain, and his interpreter
Naotaro Yanagimoto in U.S. (June 1867–October 1868):

— What emerged from the cross-checking of Japanese and U.S. historical
documents related to the Japanese residents in San Francisco

Satoshi SHIOZAKI

要 旨

高橋是清の自伝等から、幕末維新时期（1860年代後半）、米国カリフォルニア州サンフランシスコに少なからぬ日本人が長期滞在していたことが分かっている。本稿は、米国の新聞記事等を渉猟し、日本側の関連史料と照合することにより、彼らの足跡を明らかにし、日米交流史上の位置付けを試みる調査研究の一環である。1866年の幕府による海外渡航解禁後、福井藩は独自に軍備増強を図り、藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎を銃砲購入のために米国に派遣した。二人は1867年6月14日にサンフランシスコに上陸し、米国新聞に紹介記事が掲載された。佐々木は、武器購入派遣の役人というよりは、科学者、好奇心旺盛な見学者として描かれ、その記事は米国各地の新聞に転載された。当時、カリフォルニア州では中国人労働移民が激増していた。日本人は彼らと比較され、その勤勉さと知的向上心、適応力ゆえ、カリフォルニア州民の未来のビジネスパートナーとして期待されていたことが関連記事からうかがえる。通訳の柳本は佐々木の帰国後も米国に残り、英語力に磨きをかけていた。1868年3月、幕末維新の混乱に乗じて二束三文で入手した日本の工芸品の販売のために、福井藩出身の関戸由義がやってきた。柳本は彼の通訳を引き受けることになり、ハワイにも同行した。関戸は、サンフランシスコ滞在中に得たビジネスのノウハウを活かし、帰国後、サンフランシスコと同じ港都神戸のディベロッパーとして活躍する。佐々木、柳本、関戸の3人の福井藩出身者等の例から、当時、サンフランシスコには日本人が住み着き、あるいは長期滞在し、その旺盛な向学心や知的的好奇心を満たす良好な環境が醸成されていたことが分かる。

キーワード：佐々木権六（長淳）、柳本直太郎、福井藩、サンフランシスコ、幕末維新、在米日本人

はじめに

前稿で、米国カリフォルニア州サンフランシスコ（以降 SF）に、1867 年から 1870 年の間に、延べ約 20 人の日本人が住んでいたことを明らかにした⁽¹⁾。情報の出典は、地元紙 *Daily Alta*, 1870 年 12 月 15 日掲載記事、RECONSTRUCTED JAPANESE（米国社会に適合した日本人）— PROGRESS OF JAPANESE STUDENTS IN AMERICA（在米日本人留学生の進歩）である。この記事では、4 年間に SF に上陸し長期滞在した日本人を時系列的に 3 つに分けて紹介している。最初の日本人は 1867 年 5 月に SF に上陸した、幕府海軍派遣の金子と若林である⁽²⁾。本稿の目的は、彼らに次ぐ第 2 の日本人について、日米の関連史料を照合し、米国での動向を明らかにし、日米交流史上の位置づけを行うことである。

第 2 の日本人も 2 人で、福井藩派遣の佐々木権六（長淳, 1830-1916）と同通訳の柳本直太郎（1848-1913）である。佐々木に関しては、日本側の史料と米国新聞の記述内容を照合し、佐々木の米国での行動の実態を把握したい。柳本に関しては、渡米時まだ 19 歳で、初めて訪れた外国でどこまで通訳として通用したのか、また米国滞在が彼の英語力の成長にどのような影響を与えたか、という点を探りたい。

柳本は佐々木の帰国後も米国に留まっていた可能性が高く、1868 年 3 月末、個人的ビジネスの目的で SF に上陸した福井藩士関戸由義（良平, 1829-1888）のビジネスに通訳として関わった。この SF 体験は、帰国後、港都神戸のディベロッパーとして活躍した関戸にとっては人生を左右する出来事となった。

日本側の史料に見える佐々木は、福井藩の軍備増強の一環として最新の武器を調達するために派遣された役人であるが、米国新聞記事では、佐々木はどのように紹介されていたのか⁽³⁾。また、当時、日本人渡米者と同じ太平洋航路で、毎船数百人単位で労働移民が中国から渡ってきていたが、米国のメディアは中国人と比べて日本人をどのように見ていたのか、という点にも留意して史料の分析を行いたい。

SF 到着第 2 の日本人に関する記事の内容

まず、前出の、RECONSTRUCTED JAPANESE（米国社会に適合した日本人）の記事の中で、第 2 の日本人について書かれた部分の内容を以下にまとめる。原文は【英文資料 1】を参照。

第 2 の日本人の SF 上陸は、第 1（幕府海軍派遣の金子と若林）の SF 到着（1867 年 5 月 7 日）後、程なくしてのことと書かれているので、ほぼ 1 か月後の 6 月 14 日に SF

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）に入港したコロラド（Colorado）号乗船の日本人であろう⁽⁴⁾。彼らは武士あるいは貴族階級である、と書かれている。この船の日本人乗客に関する資料は前稿でまとめたので、ここでは触れない⁽⁵⁾。

一行の人数は書かれていないが、年齢は15歳から20歳で、聡明そうで動きが活発で、元気がみなぎっているという。SFに上陸する日本人の印象が聡明と書かれた例はあるが、運動選手のように元気一杯という表現は、筆者が知る限り前例が無い。念願の米国に到着した歓喜の現れだろうか。

一行は、横浜からSFに向かう船上で、髷を切り落として前髪を垂らして横分けにし、服装も米国人と同じものにした。彼ら以後、日本人留学生はSFに上陸する前にアメリカ人と同じ服を着るようになった、と書かれている。

この次の記述で第2の日本人の名前が分かる。一行の中で2人の若者が学問的領域で優れていることを示したという。1人は幾何学と自然地理学に秀でていて、もう1人は英語に熟達している。前者の幾何学者は、帰国後すぐに造船を任され、後者の言語学者は天皇の兄弟の通訳となり、彼に同行して再び米国にやってきた、と書かれている。

前者は、福井藩で造船等を担当した佐々木、後者は皇族の華頂宮博経親王（東隆彦、1851-1876）の通訳として1870年に再渡米している柳本と分かる⁽⁶⁾。この記事の執筆者は、佐々木と柳本の帰国後のことまで知っていた人物ということになる。

柳本は1848年生まれで当時19歳、佐々木は1830年生まれで37歳である。佐々木は高齢であるが、米国では20代程に見られたのだろう。

記事は、日本では、海外で見聞を広げ教育を受けてきた日本人は、帰国後は以前よりも敬意を持って迎えられるという文で終わっている。

SF 上陸前後の佐々木の動向 — Altamonte 投稿記事

佐々木と柳本に関しては、興味深い英文記事がある。*Chicago Tribune*, 1867年7月26日に掲載された記事で、同紙のSF特派員Altamonte筆6月28日となっている。佐々木と柳本のSF上陸2週間後に書かれたことになる。

SAN FRANCISCO という見出しの記事で、COMING TO SPY OUT THE LAND という小見出しの段落で日本人と中国人を比較している。ここに登場する日本人は時期的に考えて佐々木一行である可能性がかなり高い。記事の内容は以下の通りである。原文は【英文資料2】を参照。

この記事が書かれる前の4月と5月、SFに入港する船に人数の多少の差はあるが、裕福な日本人が乗ってきた。彼らの渡航目的は米国で法学、諸制度、文明等学ぶ価値のあるものは何でも学ぶことである。4月到着は、実際は3月20日SF入港の幕府の使

節団小野友五郎一行，5月は最初の日本人，幕府海軍の金子と若林を指すと考えられる。

特に，最近着いたコロラド号（6月14日SF着）には，多くの日本人が乗ってきて，海軍工廠（navy yard）で学ぶような航海学や海軍学を学ぶのが渡米目的である。その1人がPrinceと書かれている。佐々木は福井藩の家老格出身ではないが，知行200石の中級藩士の家出身で，藩の軍制改革の中心的存在の1人だった。同じ船でSFに上陸した薩摩藩士一行や，通訳の柳本とは服装等も異なり，Princeと呼ばれるだけの格の違いを感じさせたのかもしれない。

このPrinceを佐々木と推定して話を進めると，佐々木は2，3人の従者を連れてSFの繁華街モンゴメリー街（Montgomery Street）を歩き回っていたという。通訳の柳本以外にも従者がいたことになる。考えられるのは，コロラド号の乗船リストにある日本人らしき名前のGhozje, Saki, Gaugimats,あるいは、『高橋是清自伝』に名前が登場する，在SF日本人の福井藩士久保村純夫である⁽⁷⁾。

記事によると，従者の服装は完全にアメリカ風だが，佐々木は目下「変身中」で，長ズボン（pantaloon），コート，ベスト（vest），革靴（boots）は身に着けているが，頭には羊小屋のような形の三角の帽子（舟型烏帽子＝侍烏帽子，a curious sheep-shed shaped, three cornered hat of glazed material，著者意味不明）をかぶり，腹帯（girdle）に刀を2本差している，という。

彼らはSFのビジネスに目を光らせているというので，SFの目貫通りを丹念に観察して日々歩き回っているようだ。この段落の小見出しは，COMING TO SPY OUT THE LANDとなっている。記者は，佐々木一行を怪しいスパイ視しているのではなく，尋常ではない日本人の好奇心旺盛さをユーモラスに表現している。

長野によると，渡米前の佐々木は，剣術改革，砲術訓練と製造，兵書編纂，銃砲製造，火薬製造，洋式船建造，築港工事など，軍事関連の多様な分野で藩随一のテクノクラートとして活躍していた。佐々木はペリーの再来航の際，ポーハタン号に乗り込み，図画の才能を活かして大砲等の銃器を写し取ったという⁽⁸⁾。SFでも，従者とともに探索を積極的に実践したのだろう。

以上がAltamonte筆の記事の概要で，佐々木一行と思われる日本人グループのSFでの興味深い様子が描かれている。そこには大量の武器調達という福井藩の重大なミッションを帯びた重々しい役人の面影は見られない。

日本側史料に見る佐々木の米国派遣

このような米国側の史料によると，SFに上陸した佐々木は，武器購入は後回しにして，特に分野を問わない視察活動を自由に展開している。では，佐々木の渡米に関して

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）

日本側の史料はどのような情報を提供しているだろうか。

佐々木に関する日本側の情報は、本稿ではほぼその全てを長野栄俊「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」に負っている。

長野が佐々木に関して集めた一次史料は、松平文庫の藩史料である「役成人名簿」（松平文庫 899 号）、「士族略歴伝」（同 920 号）、「士族」（同 921 号）があるが、これらの史料には、佐々木の渡米は「アメリカへ出帆」（長野，p. 36）としか書かれておらず目的等は記されていない。

これも一次史料と考えられる、佐々木自身による「佐々木長淳略履歴」に渡米目的として「大砲小銃及び陸海軍用品を要求し、其の他波戸場類取り調べの命を受け」（同 p.48）と、「佐々木家家系中 長淳自筆貼付履歴書」では、「米国之大砲小銃其他諸軍用器類購求御用被仰付」（同 p. 51）と書かれている。また長男による伝記「佐々木長淳翁」では「小銃，大砲等より，軍隊の装束等の如き，和蘭の一書にては，不明なりしゆえ幸いに其時代は米国が南北戦争後にして，軍器其他何事も，新しいと察せし為，是非渡航して，之を買い入れたしと思ひし」（同 p. 49）と記されている。

以上が、長野が集めた佐々木関連の一次史料的記述における渡米の目的である。一次史料では、佐々木の渡米目的は藩の武器の買付という「公」のものとなっている。最後の「佐々木長淳翁」では、渡米理由は最新の武器の研究のための購入という「私」の目的と記されている⁽⁹⁾。

二次史料では、福井新聞に 1913 年 3 月 31 日から 13 回に渡り掲載された記事「南越奇傑佐々木長淳」がある（同 pp. 36-46）。そこでは、佐々木の渡米は「慶応三年の米国留学」という見出しが付けられ、佐々木を「渺たる一留学生」，「未開化国たる当時の日本の青書生」と記している。長野によれば、この記事が執筆された時、佐々木は存命であったので、記事の執筆者である森恒救が、佐々木に直接インタビューした可能性もある。佐々木自身の渡米当時の「留学生」という意識が記事で表現されているのだろうか。

まとめると、日本側史料から抽出される佐々木の渡米目的は、藩のための武器購入（公）がメインではあるが、佐々木個人としては、武器製造者としての探求心，知的欲求を満たすための渡米という感覚が強かったのではないか。米国側の史料では、後者の知識探求者（私）としての佐々木の言動がよりクローズアップされている。

日本側史料に見る SF 上陸から帰国まで

前出の長野の調査結果に依拠すると、佐々木の滞米中の行動は以下ようになる。

SF に 1867 年 6 月 14 日に上陸した佐々木と通訳柳本は、SF を出航（日付不明）しパナマ経由で米国東部に向かい 1867 年 7 月 22 日に NY に到着した。NY—SF 間は当

時約1か月かかったので、佐々木がSFに入港後、現地に滞在していた期間は、長くても1週間ほどだった。ちなみに幕府が軍艦購入のために米国に派遣した小野友五郎一行は、SF出航が1867年7月5日だったので、SFで両者が遭遇した可能性は無い。

佐々木が藩依頼の武器購入の許可を得るために首都ワシントンに向かったのは、7月末から8月初頭にかけてのことだろう。

首都ワシントンでは、ユリシーズ・グラント将軍（1822-1885）に面会し、武器の購入の相談をしたところ、アンドリュー・ジョンソン大統領（1808-1875）に取り次いでもらい、訪問がかなった。握手の後、佐々木は漢字の名刺を差し出したところ日本語の記述を所望されたのでカタカナで名前を書いて渡したという⁽¹⁰⁾。

その後、グラント将軍が各地に紹介状をしたためてくれて、陸海軍学校、軍器廠、火薬庫、火薬製造所、砲台、甲鉄艦等を訪問し理解を深めることができたという⁽¹¹⁾。おそらく、首都ワシントン近くのワシントン海軍工廠（Washington Navy Yard）やメリーランド州の海軍士官学校（U.S. Naval Academy）を見学してから北上し、ニューヨーク州ウエストポイントにある陸軍士官学校（U.S. Military Academy）を見学して回った。

武器の調達は順調に進み、ガヴァメント砲1小隊分、小銃数百挺、その他の軍器の購入にも成功し、荷物の発送を業者に頼み、1868年1月3日（慶應三年十二月九日）に横浜に帰着している。

佐々木は通訳の柳本を伴い、1867年6月から1867年12月まで約半年間米国に滞在していたことになるが、NYと首都ワシントン以外の様子は日本側の史料には書かれていない。

米国新聞に見る佐々木の動向と日本側史料の照合

前出のAltamonte筆の記事に見られるように、米国の新聞で取り上げられた佐々木像は、佐々木の藩の武器購入係の「公」よりも「私」の目的に反応したものが多い。以下に時系列で佐々木を取り上げた記事を追ってみる。

佐々木がSFに着いた日の翌日、*Indianapolis Daily World*（インディアナ州都）、6月15日にコロラド号到着の記事が掲載されている⁽¹²⁾。佐々木は、越前藩主の英邁な（sharpened）家臣であり、カリフォルニア州で鉱山や採掘について学び、その後、東部に移動しマサチューセッツ製造の1万5000挺の最新のライフル銃を購入すると書かれている。

本稿の冒頭で取り上げた*Daily Alta*、1870年12月15日の記事にも、佐々木と考えられる日本人は幾何学と自然地理学に秀でていると書かれている。米国人記者による佐々

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）

木のイメージは「科学者」であることが分かる⁽¹³⁾。

佐々木の米国での動向に触れた新聞記事は少なく、SF上陸の次に佐々木が米国新聞に登場するのは、*Springfield Republican*（マサチューセッツ州）、8月24日である。NY到着から約1か月が経過している。佐々木はNYから首都ワシントンに南下した後、各地を訪問しながら北上し、8月24日にスプリングフィールドに到着した。スプリングフィールドは、米国の兵器工場があり、南北戦争で北軍が使用したライフル銃の製造地である。

佐々木のスプリングフィールド訪問の目的は、藩から依頼されていた銃の買い付け、製造の見学等だったはずだが、地元の新聞に書かれている佐々木関連の記事は、地元の果物取り扱い商人とのやり取りに割かれている。佐々木は日本の植物の図説の和書を彼に渡ししている。果物から作られる、ジュース、酢、果実酒の作り方を教えてもらったお礼だという。佐々木は米以外から作られる酢を日本に導入したいと語っていたと書かれている。前の記事では、カリフォルニア州の鉱山や採掘について学ぶと書かれていたので、佐々木の関心分野の広さをうかがわせるエピソードである。

この後の佐々木の米国内での足跡は不明だが、次に登場する佐々木関連の記事から判断すると、マサチューセッツからNYに南下し、10月にはNYからパナマ行きの船に乗り、遅くとも11月にはSFに戻っていた可能性が高い。

Daily Alta, 11月5日の記事で、異常に好奇心旺盛な日本人が紹介されている。TIRELESS INQUISITIVENESS（飽くなき探求心）という見出しで、その内容から考えると、記事に登場する日本人は現状では佐々木以外に候補がいらない⁽¹⁴⁾。この日本人が佐々木だとすると、NYを10月初めには出航し、パナマ経由で11月初頭までにSFに戻っていたことになる。抄訳は以下の通りである。原文は【英文資料3】を参照。

今、SFにいる日本人（複数）は、この町で使われている、どの工場機械、技術や科学に関するものも見逃さないというくらいの旺盛な好奇心を見せている。彼らは毎日のように市内を歩き回り、あらゆる工房や工場をのぞき込み、学べるものは何でも貪欲に学んでいる。彼らは葬儀屋までも訪問し、はっきりと興味を示しながら、細かい点まで見て、お互いに、葬儀屋の特色について興味津々に質問し合っている。彼らは間違いなくSF中をチェックして回るつもりである。風変りな連中ではあるが、米国人が欠きがちな、礼儀正しさ、控え目な態度を示し、見学先の経営者の許可を必ず得ていて、威厳を保っている。

佐々木がSF渡航前に、ポーハタン号に乗り込み、大砲を熱心に詳細に描き写していたエピソードが思い出される。探索の対象があらゆる分野に拡大され、葬儀屋まで含ま

れている。一行は厚かましくなく、礼儀正しく訪問している点も記されている。

さらに、これも匿名の記事であるが、佐々木が10月にはすでにSFに戻っていた可能性を示唆している。*Daily Alta*, 10月26日の編集後記(EDITORIAL NOTES)によると、SF市内の学校で高貴な生まれの複数の若い日本人が学んでいた(Several young Japanese of high birth are now studying in this city.)という。人数、期間は不明だが、佐々木と通訳柳本はSF中心部のシティカレッジに籍を置き、英語を学校で学びながら現地工場、工房見学を行っていた可能性もある⁽¹⁵⁾。この場合は9月にNY出航となり、佐々木は東部での滞在をほぼ最短で切り上げてSFに戻ったことになる。

SFには、日本とSF間の貿易に関わっていた日本領事ブルックス(Charles Wolcott Brooks, 1833-1885)、後に日本にお雇い外国人として招聘されるシティカレッジの校長ヴィダー、日本物産店MATZO経営者、出島松造(1842-1928)と店員の佐藤百太郎(1853-1910)等が住んでいて、日本人の实地視察には大変都合の良い環境だったと思われる。1867年当時、米国全体で見ても、これほど多くの日本人、日本との関係が深い地元民がいた都市は無かった。

最後に採り上げる記事は、*Daily Alta*, 12月4日の記事で、佐々木の名前が出ている。佐々木が帰国する直前の記事である。この記事は、地震大国として知られる日本の、磁石を使った地震予知について、記者が佐々木から聞いたこととして書かれている。佐々木は、佐久間象山(1811-1864)が発明した地震予知機「人造磁ケツ」を紹介、説明したと思われる⁽¹⁶⁾。馬蹄形の磁石に糸で結んだ鉄片を吸い付け、地震の前に鉄片が落下し地震が予知できるとされていた。原文は【英文資料4】を参照。

この記事で、佐々木は機械科学と軍事の技術者のトップ(general)として紹介されている。米国東部で武器の注文、製造見学を行った後、SFでいろいろな工場見学に時間を費やしていることがこの記事でも書かれている。

勤勉で好奇心旺盛な日本人

ここで、なぜ佐々木は、福井藩の武器購入というミッションよりも、彼の科学者的側面や旺盛な好奇心において米国の新聞で注目されたのか、という点を考えたい。

Altamonteの記述にあるように、当時、SF在住日本人は、新聞上で中国人移民と比較されていた。彼が日本人と中国人との違いについて述べた個所の冒頭と最後の部分の抄訳は以下になる。原文は【英文資料5】を参照。

前略

日本人と中国人の明らかな違いが我々はずでに分かってきている。日本人は外国

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）の進んだものの利益をすぐに理解し、米国移動中に我々の習慣や礼儀作法などを取り入れる。彼らはすべてに全力を尽くそうとし、些細な点に至るまで我々の制度を学ぼうとする。この点で日本人は中国人とは全く異なる。中国人は、周囲を全く無視して、米国に何年住んでいても、本質的には中国人のままである。

中略

日本人は、米国流ビジネスも学び、SFに日本の物産を扱う店を開店する準備を整えている。中略 おそらく、今米国にいる日本人が帰国すると政府や日本人に自分達が米国で見聞きしたことを事細かに報告するだろう。そして我々は、他のどの国民よりも好奇心旺盛で興味深いこの国民と、すぐにもっと親しくなることだろう。

この記事から分かるように、日本人の強い印象を Altamonte に与えたのは、日本人と SF にすでに大勢いた中国人移民との大きな違いである。高橋是清の自伝にも、中国人移民と異なり、保兵衛という住み込みの日本人は最初の給料でヘボンの辞書を買って英語の習得に力を入れていたと、米国人の知人が語っていたことに触れている⁽¹⁷⁾。

SF の米国人の間では、1860 年に SF に上陸した咸臨丸一行、1867 年 3 月上陸の小野友五郎一行、SF でビジネスを成功させた出島松造とその勤勉な従業員佐藤百太郎、さらに幕府海軍の金子や若林といった SF 長期滞在日本人の言動から、日本人が米国から何でも学ぼうとする貪欲な姿勢に対する好意的なイメージが醸成されていた⁽¹⁸⁾。小野友五郎は幕府から派遣された役人であるが、当時日本でも指折りの数学者として知られていた。佐々木もまた、そのような、興味深い知的な日本人の一例として SF の新聞記者の目を引き、その記事は米国各地の新聞に転載されたのだろう。幕府や福井藩にしてみれば、「学者」の米国への派遣がこのような効果を産むとは想像もしていなかっただろう。

佐々木の帰国と通訳柳本直太郎

「佐々木長淳略履歴」によると、佐々木が購入した武器は、「ゴープルメント砲（口径 3 インチ、1 小隊 8 門）、レミングトン後装銃、スペンセル 7 発銃、ピストール類数百挺」で、それ以外にも「弾薬類同箱類同車類同馬具類一切の附属具は勿論、小にしては、馬の鉄沓に至るまで」あった（長野 pp. 48-49）。大量の荷物を後に残し佐々木は先に帰国したところ、積み荷は香港に送られてしまい、佐々木は香港まで出向いて交渉して日本に持ち帰った⁽¹⁹⁾。

佐々木の米国でのこのような大量の武器購入や、旺盛な知識欲を満たそうとする諸活

動は、有能な通訳の賜物である。佐々木の通訳柳本直太郎（1848-1913）に関する情報をここでまとめておきたい。

柳本に関する先行研究は断片的なものに限られており、柳本の生涯を扱った研究は無い。柳本は、福井藩の足輕の家に生まれ、1867年の佐々木渡米の通訳同行の後、1870年には皇族の華頂宮博経（東隆彦）の米国 NY 州ブルックリン留学に通訳として同行している⁽²⁰⁾。

その帰国後、文部省に出仕し、大学南校等で教鞭を取った後、1874年には東京外国語学校長となった。1875年からは鳥取変則中学校に勤務し、その後は兵庫県御用掛、長崎県大書記官、愛知県書記官等を経て、1894年から3年間名古屋市長を務めキャリアを終えた。

佐々木との渡米以前の英学修行期間は約6年間であるが、福井藩での英学修学の詳細は不明である⁽²¹⁾。蕃書調所と慶應義塾ではリーディングを、横浜ではリスニングとスピーキングを主に学んだと思われる。この日本での英学修学が、米国での通訳業務に十分だったとは思えないが、横浜から SF に向かう3週間の船中と、SF からパナマ経由で米国東部へ向かう1か月間は実践的な英語力を磨く良い機会だった。

佐々木に関する米国新聞記事では、柳本に関してはほとんど触れられていない。好奇心旺盛な佐々木の質問欲を満たすのは、通訳経験はもちろん、米国や自然科学に関する知識、英語の語彙力も不足していたはずの柳本には至難の業だったと思われる。年長で上役の佐々木の身の回りの面倒役も兼ねていたことも十分考えられる。渡米船乗客リストや米国新聞記事から、佐々木は面倒を見る付き人を日本から帯同していた可能性もある。脱藩同様に日本を出て、英国から米国に渡った福井藩士久保村純介が SF で行動を共にしていたかもしれない。

福井藩関連史料によると、柳本の横浜帰着時期で最も可能性が高いのは1868年10月～11月である⁽²²⁾。佐々木が1867年12月に柳本に後を託して先に帰国し、柳本は SF に残って船荷の配送を済ませてから横浜へ向けて乗船したのではないだろうか。後述するが、柳本としては、佐々木が単身帰国した後、佐々木の通訳あるいは兼世話役から解放され、自分の英学修行に当てたい気持ちもあっただろう。佐々木の12月の帰国から柳本の翌年10月～11月までの1年弱の間、柳本はどこで何をしていたのだろうか。

柳本の1868年のハワイ渡航 — 松田による仮説

佐々木の帰国後の柳本の米国での動向に関しては、松田裕之が『港都神戸を造った男《怪商》関戸由義の生涯』で貴重な情報を提供している。関戸由義（1829-1888）は佐々木、柳本と同じ福井藩出身で、薬種商の家に生まれた。明治以降、港湾都市神戸の発展

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）を主に陰で画策した、今でいうディベロッパー的人物である。松田は以下のように関戸とサンフランシスコ、神戸の関係を簡潔に紹介している⁽²³⁾。

「罪を犯して故郷越前を追われた関戸由義は、京都から江戸に出て医者を名乗り、明治維新前夜の混乱に乗じてサンフランシスコに密航する。同地で書画骨董の取引によって巨利を博すと、帰国後は官途に就いて、神戸進出の足掛かりを築いた。そして、海外経験を武器に、兵庫県庁の闇將軍として貿易行政や市街造成に辣腕を振るう—」

松田は関戸の SF 訪問に関しては、*Hawaiian Gazette*, 1868 年 5 月 13 日, 27 日, 6 月 17 日に掲載された記事等を基に、次のような説を立てた⁽²⁴⁾。

関戸は、幕末維新の混乱期に武家から放出された大量の骨董品や和服を携え、通訳に宇和島藩出身の城山静一を連れて、横浜からアイダホ号に乗り約 40 日かけてホノルルに到着した。そこで地元の Bartow 氏を介して持参の呉服反物等を販売した。その際に SF から呼ばれたのが柳本直太郎である。その後、関戸、城山、柳本は、ホノルルからアイダホ号に乗り、6 月 15 日に SF に上陸した。SF では 1867 年 9 月から SF に住んでいた佐藤百太郎等の助けを得て物品の販売を行い、巨利を収めて帰国した。関戸はこの SF 滞在中に港都 SF のビジネスや土地投機を詳細に観察し、帰国後、その知識を活かし、ハワイと SF で得た膨大な利益を資本として、カオス状態だった神戸を港都として発展させる画策に乗り出した。

松田説の検証

Hawaiian Gazette の記事に目を通し、関連諸史料と照合し検証を試みた結果、松田説と若干異なる結果が得られた。関戸一行の横浜出航以降の動向は以下ようになる。松田説との最大の相違点は、関戸一行は横浜→SF→ハワイ→SF→横浜というルートを経たということと、柳本は日本から帯同した通訳城山の代わりに雇われたということである。

1868 年 3 月 10 日頃 関戸と通訳、城山静一、横浜から SF 行のチャイナ号に乗船⁽²⁵⁾。
アイダホ号ではない。

同 3 月 31 日 SF 到着。通訳の城山は関戸一行を離れ、柳本を通訳に雇い SF で物品販売。

同 4 月 25 日頃 関戸、柳本、Yeguchi Yeijiro, SF からホノルル行のアイダホ

号に乗船。

- | | | | | |
|---|------------|---|--------------------|---|
| 同 | 5月4日 | 関戸一行3人 | ホノルル着 | ホノルルで物品販売。 |
| 同 | 6月7日頃 | 関戸、柳本、Yeguchi Yejiro, Ogata Tegero の4人、 | ホノルルでSF行のアイダホ号に乗船。 | Ogata はハワイで一行に参加した。 |
| 同 | 6月17日 | 関戸一行4人、 | アイダホ号でSF到着。 | 再び物品販売を行ったかは不明。SF、ハワイでの売上金で、SFで武器購入の可能性有り。その後、関戸は帰国し、柳本はSFに残り英学修行を続けた。Ogata と Yeguchi が米国に残ったかどうかは不明。 |
| 同 | 10月あるいは11月 | 柳本 | SF 発 | |
| 同 | 11月 | 柳本 | 横浜着 | |

『高橋是清自伝』によれば、SF 到着後、通訳の城山は関戸の渡米を斡旋したヴァン・リードにハワイ移民の件で不信感を抱き、SF で関戸から離れ高橋是清と行動を共にした⁽²⁶⁾。

城山の代わりに、SF にいた柳本が同じ福井出身ということもあり、SF での物品販売に協力し、ハワイにも同行して関戸の通訳を担当した。SF—ハワイ間の航海は約10日なので、関戸一行3人は1868年3月31日から4月25日くらいまで、約1か月間SFに滞在した。まずSFで日本から運んできた骨董などの物品を売り捌き、その残りをホノルルで売った。当時日本からハワイへは定期直行便が無かったので、関戸一行は横浜—SF—ホノルル—SF—横浜と移動した。6月に関戸一行が帰国した後、柳本は10月か11月頃までSFに残って英語修行を続けたと考えられる⁽²⁷⁾。佐々木との行動も含めると、柳本は1年半弱、ハワイも含めて米国にいたことになる。

関戸一行のSFでの武器購入

関戸一行のSFにおける行動を示唆する興味深い英文記事がある。SF Bulletin, 1868年4月4日に、FIRE ARMS TO JAPAN（日本への銃器輸出）という見出しの記事が掲載されている。SF 滞在中の複数の日本人が日本に送るために買えるだけの武器を購入したことを伝えている。

これとは別に、コルト（Colt）、レミントン（Remington）、スミス（Smith）、ウェストン（Weston）の大量の小銃（pistols）がSFから日本に送られたばかりである、とも書かれている。この小銃は、柳本が日本に送ったものではないだろうか⁽²⁸⁾。そしてこの4月の日本向けの武器の調達者を関戸一行と考えている。関戸は、1868年3月

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）

31日にSFに着くと、あるいは着く前から横浜のヴァン・リードを通してSFの業者に武器購入の注文を出し、SFとハワイで儲けた金を武器購入にあて、日本で売ることにより、利潤を上げようとしていたことが考えられる⁽²⁹⁾。この取引の件でも柳本が通訳として活躍していたはずである。

戊辰戦争が本格化する前に、日本各地から武器発注のオファーがSFに殺到していた可能性もある。SFからならば日本への武器の大量輸送も3週間で横浜に着く。米国東部と異なり、日本への玄関口だったSFは、日本の政変の影響をダイレクトに受ける場所であり、SFのビジネス関係者が日本との交易に大きな期待を抱いていたことも首肯できる。

おわりに

最後に、「はじめに」で提示した本稿の目的に対する回答を記したい。さらに、その延長として今後の課題を明らかにしておく。

まず、佐々木と柳本の日米交流史上の位置づけである。二人のSF滞在期間中の詳細を明らかにすることは出来なかったが、史料から判断すると、メインは、米国東部周遊後SFに戻ってきてからの1867年10月から12月の約2か月間であろう。この期間に佐々木は通訳柳本とおそらく他の同行者を伴い、市内の店や工場等を隈なく、米国人も驚くほどの旺盛な好奇心を発揮して見学に勤しんでいた。本稿では深く触れなかったが、これは、1860年にSFに上陸した万延元年訪米使節団から、1867年の幕府派遣小野友五郎軍艦購入派遣団を経て、1872年にSFに上陸した岩倉使節団に至る、渡米日本人派遣団の「何でも見てやろう」時代の一例として挙げられる。SFは日本人上陸地の大都会として、常に日本人来訪者に大きな驚きと刺激を与え、時間が許せば米国最初の見学地として豊富で有効な情報を提供していた。

佐々木と柳本は幕府派遣ではなく一藩の派遣であり、しかもグループではなく、ほぼ佐々木個人の派遣である点は前後に例が無い。その佐々木が福井藩きってのテクノクラートで、銃器のみならず、米国から学べる物は何でも学ぶという貪欲な彼の姿勢が、米国メディアの目を引き、カリフォルニアの将来のビジネスパートナーとして好意的な印象を読者に与えた。

通訳柳本の英語力の成長に関しては、それを明確に証明する史料を発見できなかった。しかし、佐々木が登場する記事を読めば、柳本が、銃器は固より、鉱業から、農産物、各ビジネスや店舗、葬儀屋、地震予知機と広範囲な話題について通訳をこなしていることが分かり、そこから彼の英語力の成長を読み取ることが可能である。ただ、佐々木が紹介された英文記事には、長文記事が無いので、そこに柳本の通訳としての当時の限界

が現れていると言えなくもない。

また、佐々木に柳本以外の従者が日本から同行していたかどうかは不明だが、もしいなければ、柳本は滞米中の佐々木の身の回りの面倒も見なければならなかった。そうであれば、もっと英語に集中して勉強したいという気持ちがあったはずである。だからこそ、佐々木の帰国後も1868年10月か11月まで米国滞在を延ばしたのだろう。福井藩出身の関戸が1868年3月末にSFにビジネス目的でやってきて、日本から連れてきた通訳城山静一が関戸と袂を分かち、新たな通訳として柳本に仕事が舞い込んできたのは、米国滞在の資金繰りに苦しんでいたならば朗報だっただろう。

佐々木の米国メディアの取り上げ方に関しては、米国派遣の目的が、銃器の大量購入であったにも関わらず、その点に関して記事が詳述することはなかった。むしろ先述したように、一地方政府が派遣した役人と思しき佐々木は、実は技術官僚であり、広範囲に及ぶ知的好奇心を言動で示し、地震予知機の仕組みのように日本の科学力の意外な高さを見せたことを記事は読者に示している。

佐々木のような日本人は、SFにすでに定住していた多くの中国人労働移民と自動的に比較対照され、知的で勤勉、適応力の高い日本人という印象が高まりSF市民の日本人に対する好意的な印象を強化することになった。新聞記者もそのような目で日本人を見ることに慣れ、少なくとも紙面上では、日本人に対する好意的な視線の連鎖が生まれていたことが分かる⁽³⁰⁾。日本に対する、太平洋をはさんだ未来のビジネスパートナーとしての期待も醸成されていた。

柳本との関連で取り上げた、福井藩出身の関戸由義の活動も興味深い。関戸はSF滞在中に港都としてのSFを短期間ではあったがじっくり観察し、そこから得たアイデアを港都神戸の開発にフルに活かした。関戸は留学生でも勤労学生でもなく、明治政府とも藩とも無関係で純粋にビジネスの目的でSFにやってきた。このような日本人は歴史には残りにくいですがSFには他にもいた可能性がある。日米交流史上大変興味深い事例である。

SF在住日本人研究は、元来は、塚越酸素彦という小浜藩の英語教師が1870年にSFに来て、何をしていたかを突き止めるための背景理解が目的だった。こうしてみると、塚越がSFに来るまでに、すでに多様な日本人の来歴があり、新聞記事等を通して向学心、知的好奇心旺盛な日本人という印象が根付いていた。塚越が渡米後しばらくはSFにとどまり、日本語教師や米国書籍の日本への輸出などに関わっていたのは、日本人が長期滞在するのに都合のよい環境が醸成されていたことが挙げられるのではないだろうか。

これまで、佐々木の米国での様子はほとんど明らかにされたことはなかった。今後の課題としては、佐々木の首都ワシントンや米国東部滞在時の新聞記事を発見し、佐々木

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）の行動の様子や現地の米国人に与えた印象等も引き続き調査したい。

次稿ではSF訪問第3の日本人と、その他のSF在留日本人に関する情報をまとめる予定である。

最後になったが、佐々木研究で史料や研究成果等最大限の協力を惜しまずに提供してくれた福井県立文書館主任の長野栄俊氏、柳本関連史料で御世話になった福井藩史研究者、東京農業大学教授熊澤恵里子氏、原稿に目を通して下さった、大妻女子大学短期大学部名誉教授高木不二氏に感謝の言葉を述べたい。また、本稿では、関戸研究の功労者、神戸学院大学教授松田裕之氏の労作に大変お世話になったことを記し謝辞としたい。

【英文資料】

【英文資料1】 *Daily Alta*, 1870年12月15日（太字は第2の日本人に関する記述で、筆者による）

RECONSTRUCTED JAPANESE — PROGRESS OF JAPANESE STUDENTS IN AMERICA

※この記事は *Chicago Tribune*, 1870年12月29日に転載されている。そこでは副見出しは、PROGRESS OF SOME OF THE JAPANESE STUDENTS IN SAN FRANCISCO — THEIR PRESENT INCLINATION TO COME TO THE EAST となっており、視点が脱カリフォルニアとなっている。

Illustrative of the wholesome good flowing from the pleasant relations between the United States and Japan, we have only to glance at the Japanese who have been, or are at present, in process of reconstruction at the collegiate institutions of the country. Three years ago, two Japanese officials（金子と若林，筆者による），pursuant to instructions from their own government, came to California to study the language and customs of the American people. They learned English rapidly, and displayed great eagerness and aptitude for the acquisition of a thorough knowledge of mathematics. In fact, a thirst for mathematics is one of the characteristics of the race. The two representatives of Japan to whom we refer made excellent progress in their studies and returned home with a high opinion of America and her people. **The information disseminated among the Japanese stimulated others to violate time-honored traditions, and in a brief space of**

time another delegation from the two-sworded or aristocratic class put in an appearance here. The Japanese arriving on this occasion were youths of from 15 to 20 years of age, intelligent-looking athlete fellows, full of life and spirits. While *en route* to the port, they commenced to abandon their natural customs and dress, and assumed American garments. The top-knot was discarded, the hair allowed to grow in front and carefully parted at the side, and since that time, Japanese students have invariably dressed as Americans before landing here. Of the second instalment of Japanese which arrived here, two young men displayed remarkable proficiency in their studies — one excelling in geometry and physical geography, and the other in the English language. The geometrical expert was appointed to the command of a Japanese ship, soon after his return home: the linguist became the interpreter for the Mikado's brother, and subsequently accompanied his employer to this country. Instances similar to the above are not of unusual occurrence, if the statements of the Japanese are to be relied upon. They relate that the Japanese who travel abroad, and become educated in the language of foreign nations, are treated with increased respect upon returning to their native land.

後略

【英文資料 2】 *Chicago Tribune*, 1867 年 7 月 26 日

SAN FRANCISCO

THE JAPANESE AND CHINESE

COMING TO SPY OUT THE LAND

前略

Every vessel coming from Japanese ports at this time, brings a greater or less number of Japanese of wealth, coming to study our customs and learn all which is worth their learning, of our laws, institutions and civilization generally. There are already four Japanese students in our City College, where no Chinaman ever entered even as a spectator, and by the Colorado, on her last trip, came a number of Japanese gentlemen who propose to study the art of navigation and marine warfare, as taught at the Mare Island Navy Yard, under Admiral Craven. One of them is a Prince, and he daily promenades Montgomery street with two or three

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）

followers, wearing a curious sheep-skin shaped, three cornered hat of glazed material, and two swords in his girdle. His servants have already adopted the full American costume, and he is making progress in that direction, having already got as far as the pantaloons, coat, vest and boots. These fellows have a sharp eye to business,

後略

【英文資料 3】 *Daily Alta*, 1867 年 11 月 5 日

TIRELESS INQUISITIVENESS

The Japanese now in our city appear to be inquisitive to a degree in regard to every kind of mechanical operation going on in the country, and nothing which pertains to the arts and sciences, as practiced among us, escapes their notice. We see them daily wandering around the town in all directions peering into every workshop and factory, apparently studying everything carefully, and learning everything that is to be learned. They even visit the undertakers' shops, and watch all the details of the business with evident interest, explaining all the particulars to each other with as much apparent relish as they would discuss a dinner at the Occidental. They evidently mean to do the town thoroughly, and we doubt if many of our American tourists in foreign lands ever pick up as much valuable information as these outlandish-looking fellows from the other side of the Pacific will carry home with them. Withal they are exceedingly polite and unobtrusive, never going anywhere without asking permission of the proprietors of the premises, and conducting themselves at all times with dignity, not always apparent in the conduct of our own people.

【英文資料 4】 *Daily Alta*, 1867 年 12 月 4 日

It is well known that earthquakes are common in parts of Japan, and not unfrequently they are destructive. If there be any person who has a doubt of there being science in Japan, let them listen to the way they know the coming of an earthquake, and are enabled to warn the inhabitants. A horse-shoe magnet is suspended from a beam, and a bar of iron, of about its capacity, to keep in attraction, is attached to the open ends. Under this, at a short distance, are two bells, like

the thumb-spring table bells we use. This completes the philosophical instrument.

Preceding all earthquakes, and as a necessary condition to these phenomena, there is a marked change in the electric condition of the air. An unwonted sultriness and oppressive breathing are its characteristics in this latitude. The Japanese have discovered that the magnet suffers a diminution of its power to attract iron in this condition of the atmosphere, and that it may be a day or so before the catastrophe follows the warning.

The power of the magnet is so nearly balanced by the bar of iron, that on the occurrence of sufficient disturbance of the electric equilibrium, the iron bar is set free, and falling on the spring-bells, the alarm is given to all within hearing, and thence it is communicated to the public in season to make preparation for its reception.

We get this information from General Sasaki Gouruk, of Daimio Yetsezen's principality. This officer has been East, buying arms for his Government. He is a scientific, mechanical and military engineer. He has made a good use of his time studying the industries of San Francisco.

※この記事は、*Gold Hill Daily News* (ネバダ州), 1868年6月5日(記事初出の約半年後)に、THE QUAKEOMETER という見出しの記事で全文が引用されている。記事の最後の段落では、この地震予知機の理論は欧米では知られていないもので、今後の地震の衝撃(earthquake disturbance)の起源の発見の大きなカギになるかもしれない、と期待を寄せている。

【英文資料 5】 *Chicago Tribune*, 1867 年 7 月 26 日

COMING TO SPY OUT THE LAND

There is one marked difference in the characters of the Japanese and the Chinese which is already becoming apparent to our people. The Japanese are quick to appreciate the advantages of foreign improvements of all kinds, and readily adopt our manners and customs when travelling among us. They are anxious to perfect themselves in all our arts, and to study our institutions in the minutest details. In this they differ from the Chinaman. The latter is "a law unto himself," and

however long he may remain among us, he remains essentially a Chinaman.

中略

The Japanese are acquiring into our modes of doing business, and have already made arrangements for opening a large Japanese store in SF. 中略 It is probable that the visitors from the Japanese Islands now among us will render a full report to their Government and people of what they see among us, and we are likely to soon much better acquainted with that curious and interesting race than any other people.

【英文資料 6】 *SF Bulletin*, 1867 年 6 月 27 日

JAPANESE LEARNING ENGLISH

前略

There seems to be a wide difference between the Japanese and the Chinese in the matter of appropriating all the knowledge open to them by contact with foreigners. Of the thousands of Chinese who visit these shores, very few to learn the English tongue — the most intelligent house servants going no further than to catch the meaning of the few words most necessary in the daily round of duties. There is a school in this city, where the Chinese make some attainments in the elementary knowledge of English, and where a creditable desire is shown for knowing. The wonder is that these people are not spurred on to better attainments by the commercial advantages so sure to inure to them by making themselves masters of the knowledge within their reach.

《注》

- (1) 塩崎智「幕末維新时期（主に 1866 年～1870 年）サンフランシスコ在住日本人関連史料調査報告——『高橋是清自伝』に登場する「金子」に焦点を当てて」pp.126-128 参照。署名は無いが、SF 在住日本人に詳しい米国人が投稿した記事である。筆者は、SF 市内中心部にあったシティカレッジ（City College）の校長、ピーター・ヴィダー（Peter Vrooman Veeder, 1835-1896）が筆頭候補ではないかと考えている。ヴィダーの名前は SF に上陸した日本人の記録に散見され、1871 年には日本に教師として招かれている。彼が校長を務めていたシティカレッジは少なからぬ日本人が学んでいたが、計 20 人にもものぼる日本人のうち 1 人も名前が書かれていない。日本人の中には幕府関係者等の密航者もいたので、米国新聞とはいえ名前を明かすことはためられたのだろうか。
- (2) 塩崎前掲参照。金子と若林に関する日本側史料は未見である。米国側史料でも 2 人のフル

ネーム、帰国時期等の基本的情報が把握できていない。

- (3) 佐々木の渡米を許可した幕府（日本外国事務局）発行の書類（現在のパスポート）には、「亜国留学證書」（福井県文書館所蔵）と書かれている。親藩とはいえ米国渡航の目的が武器購入と伝えることは憚られただろう。
- (4) 後述するが、佐々木に関する日本側の二次史料の一つ「南越奇傑佐々木長淳」ではグレート・リパブリック号（Great Republic）と書かれている（長野栄俊「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」p.39）が、コロラド号が正しい。
- (5) 塩崎前掲，pp.119-123 参照。この船には、横浜在住の日本人宣教師ブラウンの家族や、吉原重俊、仁礼景範等の薩摩藩米国派遣留学生も乗船していた。
- (6) 長野栄俊「テクノクラート佐々木権六の幕末」p.162。佐々木は、帰国後、福井藩の造船の指導的地位につき、中浜万次郎を呼び一番丸という帆船を建造し、三国港から2か月かけて品川に到着した。明治以降は、1871年に工部省に呼び出され、東京の勸工寮に出仕し製糸場の建設を任された。その後は養蚕業界と紡績技術の発展に貢献した。
- (7) 塩崎前掲，pp.134-135 参照。Ghozje 等3人は佐々木と同じコロラド号の乗船客として名前が書かれているが、正確な名前は不明である。佐々木が通訳の柳本以外に、身の回りの世話をする従者を日本から同行した可能性はある。

久保村に関しては、塩崎前掲，注(8)pp.139-140を参照。松田裕之「神戸市街を作った影の主役について——関戸由義と関戸慶治の仕事から」pp.83-86に、久保村の渡米に関する興味深い情報が提供されている。出典は石河幹明『福沢諭吉伝』4巻「米国で日本人を救ふ」（pp.631-632）で、それによると、久保村は福井藩からほぼ脱藩の形で渡米し、ボストンで貧窮生活を送っていたところ、慶應義塾の恩師の福澤に遭遇し、帰国の旅費を融通してもらったという。福井藩の史料では、久保村は渡英したと書かれているので、アジア経由で英国に渡り、そこから大西洋を渡り、ボストンにたどり着いたことになる。この説を採ると、久保村の出国想定日と齟齬をきたし、福澤がボストンを訪問したという記録も無いので、松田は、久保村は日本からSFに渡り、そこで福澤に遭遇したのではないかと考えている。久保村は『高橋是清自伝』では、窪村純雄と書かれていて、高橋がSFに到着した1867年9月にはまだSFにいた。佐々木のSF市内視察に同行し、生活費あるいは学費を負担してもらっていたのではないだろうか。

- (8) 長野「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」p.44，48 参照。福井藩の一連の武器改革における佐々木の位置づけに関しては、三上一夫「越前藩の強兵策について——海防対策と洋式兵器工業を中心に——」，高木不二「慶応期の越前藩政と中央政局」を参照。
- (9) 佐々木は、もっと早い時期に密航渡米を藩に願っていたが、それは認められず、1866年の渡航許可発令を待って幕府に正式に報告しての渡米となった。一刻も早く、西洋文明の実態を現地で見聞し、関係者に質問し、直接に学びたいという旺盛な意欲の持ち主であった。
- (10) 当時の米国新聞が好んで取り上げそうな出来事だが、これが記述された新聞記事及びNY滞在中の佐々木の動向を報道した記事も未見である。
- (11) この手紙の日本語訳は長野，前掲 p.45 に掲載されている。これによると、佐々木は陸軍全体に関する兵制を学びたいと思っており、これに関する書籍、軍器をすべて米国政府を通して買い求めることを望んだという。グラントは各種の軍装、武器、馬具、陸軍教育や法規に関する書籍を佐々木に寄贈するよう命令を当該部署に出した。また、佐々木が海軍に関しても同様のことを望めば、海軍省に紹介する旨を記している。
- (12) 長野氏提供による。6月15日の *World* (New York)，6月22日の *Daily Constitutionalist* (ジョージア州 Augusta)，同日の *New Orleans Daily Crescent* (ミシシッピ州ニューオーリンズ)，にも同じ記事が転載されている。*Daily Alta*，6月15日の記事は武器購入には触れ

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）

ていない。いずれも短い記事だが、全米各地の新聞に転載されていた。

- (13) 米国新聞記者のインタビューに答えていたのは通訳の柳本である。海外渡航が初めての柳本が通訳としてどれほど正確に米国人記者と佐々木の意図を伝えられていたかは疑問が残る。柳本の通訳が米国人記者の要求に十分に答えられていたなら、より長文の記事になっていたのではないか。
- (14) 1867年10月から11月頃、SFにいた日本人として候補に挙げられるのは薩摩藩士伊東祐亨（1843-1914）である。伊東は薩摩藩士の木葉十蔵を伴い、渡米船の下級船室で意気投合した仙台藩士高橋是清とともに9月14日にSFに上陸し、紹介状を携えて幕府海軍が派遣した金子を探していた。高橋の自伝によると、伊東は同じ船で横浜にとんぼ返りしたことになっている。しかし、次の横浜行船便がSFを出たのは10月14日なので、伊東は11月5日辺りにはすでにSFにはいない。伊東の訪米の主目的は海軍関連施設の視察と考えられる。SFに10月中頃に入港した横浜発SF行直行便の乗船リストは未確認である。
- (15) 9月14日にSFに入港したグレート・リパブリック号には約50人の日本人が乗船していた。勝小鹿（勝海舟の息子）と仙台藩留学生一行（高橋是清を含む）、福岡藩留学生一行、薩摩藩士伊東祐亨と木葉十蔵、佐倉藩士佐藤百太郎、軽業師一団などである。しかし、いずれもパナマ経由で米国東部に移動するか、伊東のように1か月間SFに滞在して日本に戻るかの道を選んでいる。この中で高橋是清と鈴木知雄以外に、SFに長期滞在した日本人の記録は未見である。伊東と木葉は10月14日の横浜行の便ですでにSFを出航した可能性が高い。このシティカレッジ在学の日本人は第1陣の金子と若林の可能性もある。なお、Altamonteの記事にあるように、佐々木渡米以前にシティカレッジではすでに4人の日本人が学んでいた。シティカレッジで学んでいた日本人リスト作成も今後の重要な課題である。
- (16) 東徹『佐久間象山と科学技術』によると、この地震予知機は、象山がオランダの書物の記述を基にして作ったと言われている。現在は長野県長野市にある真田宝物館に保存されている。佐久間象山の弟子に橋本左内（1834-1859）がおり、橋本と佐々木は生涯を通して親交を結んでいた。佐々木は佐久間作の地震予知機については橋本から情報を得たのではないだろうか。
- (17) 『高橋是清自伝』p.55。関口保兵衛については次稿で扱う予定である。
- (18) 出島、佐藤その他のSF在住日本人に関しても次稿で入手した史料を紹介する。
- (19) 長野「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」pp.40-41。「南越奇傑佐々木長淳」には、「此のガヴァメント砲は、会津の役に翁（筆者注、佐々木）の工夫なるパトロン弾薬を填装して、天守に打込み敵味方の心胆を寒からしめたのである。一面翁は之等の大砲、弾薬庫、レミングトン小銃、スペンセル七連発銃、ピストル等の製造を開始せんとするに際して、世は廃藩置県となった」と書かれている。会津藩の降伏は西暦で1868年10月29日であり、佐々木が米国で購入した大砲がこの記述通りに使われた可能性はあるが、史実としての検証は出来ていない。佐々木は米国から購入してきた銃を福井で複製しようと考えていた。
- (20) 華頂之宮の留学先であるブルックリンの学校では、SFの出島の日本物産店で働いていた佐藤百太郎が一度帰国してから1871年に再渡米し学んでいた。柳本はSF滞在時に佐藤と知り合い親交を結んでいた可能性がある。華頂之宮の留学に関しては、塩崎「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（1）」を参照。
- (21) 柳本が生まれてから通訳として佐々木に同行するまでの経緯は、以下の通りである。福井藩士履歴（『福井県文書館資料叢書』19号 pp.81-82）、熊澤恵里子「幕末維新期の福井藩政改革と藩校 ― 地方教育史研究の視点から ―」（『福井県文書館研究紀要』1号 p.53）等を参照。

嘉永元年三月七日（1848年）に、福井藩足軽（禄八石二人扶持、小坊主三人扶持）の柳

本久兵衛の子として生まれた。文久元年六月（1861年）、13歳で藩から英学修行を命じられる。翌文久二年（1862年）、蕃書調所入門を命じられ江戸へ移動。元治二年（1865年）、横浜で外国人相手の英学修行。

Wikipediaの柳本直太郎の項目には、佐々木との渡米前に横浜でブラウンに英語を習ったと書いてある（最終閲覧2024年12月28日）が、これは帰国後で、1870年の華頂之宮同行の再渡米の前のことである。

慶応二年二月（1866年3月～4月）には慶應義塾に入社した。柳本の前後に入社した、本稿に関係ある者は以下の通りである。福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』を参照した。米国渡航中、渡航後も、柳本は慶應人脈に恵まれていた。

- ・久保純介（久保村純介、福井）元治元年六月二十四日入社 佐々木、柳本のSF着時に在SFの可能性あり。
- ・谷元兵右衛門（道之、薩摩）元治元年七月入社 佐々木、柳本と同じ船で渡米
- ・木場十蔵（薩摩）元治元年十一月十九日入社 高橋是清と同じ船で渡米
- ・柳本直太郎（福井）元治二年二月十二日入社
- ・肥後十郎（薩摩）慶應二年四月四日入社 佐々木、柳本と同じ船で渡米
- ・大條清助（仙台）慶應二年三月二十六日入社 佐々木、柳本のSF着時に在SFの可能性あり。

その後、慶應三年四月八日（1867年5月11日）に横浜に移動し、同月26日に米国SFに向けて横浜を出航した。

- (22) 柳本の帰国の時期は、福井県の研究者間では明治元年十月とされている。福井藩士履歴では、出国はあるが帰国の記述が無く、「慶應四辰正月御国表江引越」、「明治と改元、十月晦日江戸表から兵庫江着」としか書かれていない。横浜で発行されていた英字新聞の下船者リストでも確認ができていない。

柳本は、佐々木との渡米、華頂宮との渡米の後、大学南校で教壇に立った。担当は窮理学で、御前講演では自然地理学に関して話している。史料から見る限り、柳本は英語通訳者であり、特に専攻分野は無かったが、佐々木の在米中通訳をしているうちに、佐々木が関心を持っていた理科学系の内容に詳しくなったのだろうか。

- (23) 松田裕之『港都神戸を造った男 《怪商》関戸由義の生涯』p.8。
- (24) 松田裕之「神戸市街を作った影の主役について―関戸由義と関戸慶治の仕事から」p.67。
松田は、関戸を、高橋是清の自伝に書かれている（p.68）、維新の混乱に乗じて武家からただ同然で処分された雑貨類をアメリカに売り込みにやってきた越前出身の医師と同定している。高橋の自伝によれば、この医師は、宇和島藩出身の城山静一を通訳に連れて渡米した。
- (25) *Daily Alta*, 1868年4月1日によると、3月31日SF入港のチャイナ号の乗船客に、Dr. Yeshiro と F. Secchi という日本人の可能性が高い名前がある。前者が Sekido で（3つの母音が一致）、後者は城山静一の Seichi の聞き取り間違いの可能性が高い。城山は英学修行で出てきた横浜で関戸と知り合ったのではないかと推測される。関戸一行は1868年3月10日頃横浜出航のチャイナ号に乗り3月31日にSFに入港したことになる。なお、松田が横浜・ホノルル・SF間就航と考えたアイダホ号は、SF・ホノルル間を就航していた。
- (26) 『高橋是清自伝』pp.68-69。
- (27) *Hawaiian Gazette*, 1868年5月13日に掲載された記事の柳本に関する箇所を、引用する。ハワイの新聞で柳本について書かれているのはこれだけである。短い文だが情報量は少ない。

Zangimoto (student and interpreter), has lately returned from the Atlantic States,

福井藩士佐々木権六（長淳）と通訳柳本直太郎の米国体験（1867年6月～1868年10月）

and is, therefore, somewhat acquainted not only with the English language, but with our customs and ways.

英文の時制や単数・複数に留意して意味を取ると、柳本は、大西洋岸諸州の米国東部から最近戻り、と書かれているので、佐々木の帰国後、柳本は往復2か月かけて再び米国東岸に移動し複数の州にいた可能性がある。戻った（returned）先は記事の執筆者がハワイ住民であればハワイになるが、柳本がハワイに以前にもいたことを示す史料は無いので、おそらくSFを指すのではないか。日本に戻り日本から来たという可能性も否定はできない。Studentという身分から米国の学校に在学していたことも考えられる。佐々木との長期にわたる通訳経験で、英語だけでなく米国人との交際、交渉にも慣れてきていることが分かる。

なお、Ogataはmerchantで、ハワイへの渡航経験があり、今回の販売用の物品の管理を担当している。Yeguchiは他の記事ではZeguichとも綴られていて身分はstudentであり、数か月ハワイに残って学校に通い英語を勉強し、将来は貿易業者として身を立てたい旨が記事に書かれている。

- (28) 日本側の史料「佐々木家系中 長淳自筆貼付履歴書」には、明治元年四月二日（4月28日）に佐々木が福井で米国製の大砲を使い、藩主慶永を前に射撃の披露した旨が書かれている（長野「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」, p.51）。これが事実だとすると、大砲が先に送られて、小銃は後回しにされたことになる。

- (29) 関戸がSFから帰国した時に鉄砲を買い込んできた、という資料もある（松田「神戸市街を作った影の主役について―関戸由義と関戸慶治の仕事から」p.73）。

関戸もまた、佐々木と同様に、SFであらゆるビジネスチャンスに目を光らせていた。佐々木との行動で英語力と知識に磨きをかけた通訳柳本の貢献度が高かっただろう。前出の*Hawaiian Gazette*, 1868年5月13日の記事でも、関戸一行が情報収集に積極的（eagerness to acquire information）と書かれている。松田によると、関戸は神戸での土地買収はSFでその前例を知ったという。関戸もSFで広範に渡ってビジネスの情報を入手していたことが分かる（松田『港都神戸を造った男』p.90）。関戸がSFに上陸し、そこで収集した情報と見聞が港都神戸の発展に繋がったという点は日米交流史上重要である。

柳本は後年、1878年、兵庫県御用掛県少書記官に任じられ、大書記官に進んだ。当時すでに土地売買等で兵庫で財を成していた関戸との縁が関係していたとも考えられる。

- (30) *SF Bulletin*, 1867年6月27日のJAPANESE LEARNING ENGLISHという記事でもSF在住の日本人と中国人を比較した内容が見られる。日本に1万3000冊の米国の学校用教科書が送られたという報道に啓発されて書かれた記事である。小野友五郎一行の福澤諭吉がNYで購入した12箱分と言われる英文書物のことだろうか。米国に来て食欲に知識、技術を吸収しようとする日本人と対比して、ここでは中国人は英語を学ぼうとしない、最も聡明な者でも、日常の労働に最低限必要な英語表現しか学ばないと書かれている。また、市内には中国人が英語を基礎から学べる学校もあり、そこで英語の基礎を身に付けて学びに興味を示す中国人生徒もいるが、それが、仕事を通じた生活の向上という意欲へつながらないのは驚くべきことである、と述べている。原文は【英文資料6】参照。

前出の*Daily Alta*, 10月26日の編集後記（EDITORIAL NOTES）でも、カリフォルニアにとって日本との交易は莫大な価値があり、日本人は中国人よりもはるかに進歩的な精神の持ち主であることをすでに証明している（There is good reason to hope that the trade of Japan will be of immense value to California. The Japanese have already proved that they have far more of the progressive spirit than the Chinese.），と書かれている。

参考文献

- 東徹『佐久間象山と科学技術』（思文閣出版，2002年）。
- 石河幹明『福沢諭吉伝』第4巻（岩波書店，1932年）。
- 熊澤恵里子「幕末維新期の福井藩政改革と藩校：地方教育史の視点から」（『福井県文書館研究紀要』第1号 2004年）pp. 37-61。
- 熊澤恵里子『幕末維新期における教育の近代化に関する研究：近代学校の生成過程』（風間書房，2007年）。
- 塩崎智「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（1）」（『拓殖大学語学研究』第114号 2007年）pp. 121-142。
- 塩崎智「横浜発サンフランシスコ行直行船便の日本人船客リスト（1868年と1869年）：日米両史料を活用した試み」（『拓殖大学論集．人文・自然科学』第45号 2021年）pp. 97-122。
- 塩崎智「小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦）の化学，医学，英学修業：伝記『金蘭簿物語』の出生から渡米までの記述の検証」（『拓殖大学論集．人文・自然科学』第49号 2023年）pp. 156-183。
- 塩崎智「幕末維新期（主に1866年～1870年）サンフランシスコ在住日本人関連史料調査報告：『高橋是清自伝』に登場する「金子」に焦点を当てて」（『拓殖大学論集．人文・自然・人間科学研究』第51号 2024年）pp. 116-144。
- 高木不二「慶応期の越前藩政と中央政局」（『近代日本研究』第16号 1999年）pp. 37-63。
- 高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝（上）』（中央公論社，1976年）。
- 長野栄俊「佐々木権六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」（『若越郷土研究』52巻2号 2008年）pp. 30-57。
- 長野栄俊「テクノクラート佐々木権六の幕末」（本川幹男 他著，福井県郷土誌懇談会編『幕末の福井藩』岩田書院ブックレット 歴史考古学系；H-29 2020年）pp. 162-167。
- 福井県文書館編『福井藩士履歴 11 新番格以下4ウ～マ』福井県文書館資料叢書19（福井県文書館，2023年）。
- 福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』（慶應義塾 1986年）。
- 真杉高之「出島松造小伝」（『静岡の文化』第26号 1991年）pp. 59-62。
- 松田裕之「神戸市街を作った影の主役について——関戸由義と関戸慶治の仕事から」（『神戸学院大学経営学論集』第12巻1号 2015年）pp. 53-130。
- 松田裕之『港都神戸を造った男：《怪商》関戸由義の生涯』（風詠社 2017年）。
- 三上一夫「越前藩の強兵策について——海防対策と洋式兵器工業を中心に——」（『若越郷土研究』第12巻3号 1967年）pp. 41-53。

（原稿受付 2024年10月22日）